



Title	琥珀のなかのアメリカ: Vladimir NabokovのPale Fireにおける封じ込めの詩学
Author(s)	後藤, 篤
Citation	大阪大学英米研究. 2024, 48, p. 71-96
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99601">https://hdl.handle.net/11094/99601</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 琥珀のなかのアメリカ

—Vladimir Nabokov の *Pale Fire* における封じ込めの詩学—

後藤 篤

はじめに——Nabokov 研究の現在

新たな世代の読み手たちが牽引した 2010 年代の英語圏における Nabokov 研究において、作者自身が主張する非歴史性や非政治性に疑問符が付されたことは記憶に新しい。この種の読みのモードに先鞭を付けたのは、Nabokov を「銀の時代」のロシア政治思想史と結び付けた Dana Dragunoiu の *Vladimir Nabokov and the Poetics of Liberalism* (2011) である。それを受けた Will Norman は *Nabokov, History, and the Texture of Time* (2012) において、Fredric Jameson の *The Political Unconscious* (1981) を彷彿とさせる手付きで 1940 年の渡米以降のナボコフの文学的営為をラディカルに歴史化・政治化してみせた。同書のタイトルが示唆する Nabokov 研究の歴史主義的ないしは新歴史主義的転回は、約半世紀にわたる作家の創作活動に息を潜めた 20 世紀の負の遺産たる強制収容所の記憶を丹念に解きほぐした、Andrea Pitzer の *The Secret History of Vladimir Nabokov* (2013) のうちにも見て取れる。他方、Yuri Leving が *Keys to The Gift* (2011) に続く共編著・共著 (Bertram and Leving; Leving and White) で探究した Nabokov をめぐる出版文化史研究の可能性は、美的な自律を求めてやまない職業作家のモダニスト的感性を出版ビジネスとの相克のうちに捕捉した Duncan White の *Nabokov and His Books* (2017) によってさらに押し広げられた。

ひとえに精緻なテクスト解釈を金科玉条としてきた従来の批評の枠組みを問い合わせなく、Nabokov 文学の知られざるコンテクストを発掘し再評価す

ること。前述の研究者たちが積極的な意味を見出したこの種のアプローチは、*Vladimir Nabokov in Context*（2018）が書店に並ぶ昨今、もはや定番といった観さえある。若手からベテランまで、総勢30名の執筆陣が作家の生き立ちや交友関係、職業、地理的移動、文学的なモード、同時代の文化潮流そして社会的動向といった多様な文脈を議論の俎上に載せつつ、Nabokov を “the social historical, ideological and cultural contexts of his time” (Bethea and Frank, “Contextualising” 3) に再定位することを目指した同論集の企図は、2021年に刊行された *Nabokov Online Journal* (第15巻) の特集 “Vladimir Nabokov: History and Geography” にも着実に受け継がれている。2019年にパリ移民史博物館との共催によるフランスでの国際学会にもとづくこの企画の趣旨について、特集原稿の編者たちは Nabokov 文学の歴史的・地理的次元に関する議論がいまだ不十分であることを指摘しつつ、次のように説明する。“By examining the connections between Nabokov’s texts and history and geography, the various articles read Nabokov against the grain by questioning certain approaches that insist on the autotelic character of his work and its supposed resistance to historical and geographical discourses” (Chupin, et al. 1). こうした最新の研究動向を鑑みて言えば、いま Nabokov を読みなおすことは、作家の意図を逆撫でること——新批評的なテクストへの没入を絶えず読者に求めてやまない死せる作者の声に抗いながら、その創作がうちに秘めた歴史認識や政治意識を見つめなおすことに他ならない。

この問題意識のもと、本稿では *Lolita* (1955) に次ぐ Nabokov の代表的な英語小説である *Pale Fire* (1962) の再読を試みる。議論の前半では本作をめぐる批評史的な通説を概観したのち、J. M. Coetzee が 1970 年代前半に発表した作品論を手がかりに、Nabokov の（非）歴史性をめぐる問題の所在を確認する。それを足掛かりに、後半では作中の「琥珀」のモチーフと結び付いた「封じ込め」のイメージを、物語の地理的表象との関連で政治的かつ修辞的に読み解いてみたい。*Pale Fire* の発表の翌年の秋、長らく絶版となっていた *Bend Sinister* (1947) の復刊準備にあたって序文を書き下ろした

Nabokov は、そこで “Politics and economics, atomic bombs, primitive and abstract art forms, the entire Orient, symptoms of ‘thaw’ in Soviet Russia, the Future of Mankind, and so on, leave me supremely indifferent” と主張した (xii)。本稿の目的は、このように自作のテクストを同時代の政治社会的コンテキストから切斷することを是とした作者の強硬意見とは裏腹に、その創作が全面核戦争の不安が日常と化した高度冷戦期の現実を多分に反映していたという端的な事実を提示することにある<sup>1</sup>。

## 1. 再読の迷宮

*Pale Fire* の物語は、アメリカ東部に位置するア巴拉チア州ニュー・ワイーなる架空の大学町を舞台に、1959 年に不慮の死を遂げた詩人 John Francis Shade の未完の遺作 “Pale Fire” をめぐって展開する。Shade の遺稿編集者を自称する文学学者 Charles Kinbote の署名、そして “Oct. 19, 1959” (29)との日付が添えられた “Foreword” に始まるそのテクストは、全 4 詩篇、合計 999 行から成る “Pale Fire” の本文に膨大な “Notes” が続き、明らかに恣意的な見出しが並んだ “Index” で結ばれる。ワーズミス・カレッジで Shade の同僚として教壇に立つ Kinbote がしきりに読者に向けて訴えかけるところでは、一見すると告白詩のごとく自伝的な趣が前面に押し出された “Pale Fire” はその実、北欧にあると思しき「ゼンブラ (Zembla)」なる王国で 1951 年に起こった共産主義革命と、亡命者としてアメリカを目指した国王のめくるめく冒険、そして暗殺者 Jacob Gradus の必死の追跡を密かに描いているという。だが、周囲の人々から精神異常の疑いを向けられるこの胡乱な註釈者の言葉は、Nabokov の一人称の語り手の常として、絶えず数多の解釈の選択肢を読者の眼前にちらつかせてやまない。

はたして Kinbote はゼンブラ国最後の王、Charles II こと Charles Xavier Vseslav なのか。それとも、彼の姓は V. Botkin と呼ばれる端役の姓のアナグラムであり、その正体は周囲と分かり合えずに孤独な日々を送るなかで精

神に変調を来してしまった、一人の悲しい “American scholar of Russian descent” (306) にすぎないのか。あるいは、己の半生を顧みながら来世に思いを馳せる Shade の長篇詩は、長年連れ添った妻 Sybil と、若くして自ら命を絶った一人娘 Hazel を想う、詩人の家族愛に貫かれているのだろうか。いや、やはり第1詩篇冒頭で歌われる “that crystal land” (33) とは、Kinbote が郷愁の念を込めて語る彼の祖国の謂いであり、それゆえに詩人が遺した不完全な英雄対韻句の韻律には、前王殺しの陰謀を企む過激派の秘密組織 “Shadows” によって合衆国へと送り込まれた、Gradus の足音が不気味に反響しているのではないか。ゼンブラ王の命を狙いながらも最終的には Shade を射殺してしまう、出来損ないの魔弾の射手——そもそもの話、数々の偽名を駆使するこの变幻自在かつ神出鬼没の刺客が、Kinbote が間借りした木造邸宅の持ち主である判事に深い恨みを抱いた、精神病院からの脱走者 Jack Grey ではないと言い切れるのか。

はたまた、ここで 1960 年代後半に世に出た Page Stegner の作品解釈に対する Andrew Field の反論を端緒として、その後 Tony Tanner や Julia Bader ら数々の研究者たちを巻き込んで発展した長年の論争を顧みてもよい (Stegner 129-30; Field 300, 317-18; Tanner 33-34, 36; Bader 40)。すなわち、実は Kinbote とは Shade の文学的想像力の産物なのだとしたら——もしくは、逆に “Pale Fire” の作者の方こそが註釈者の誇大妄想によって生み出された彼の存在の影なのだとしたら——そうした作中人物の不可解な自作自演は、とりわけ生前の作家が議論を混ぜ返すように両者の相互想像関係を語っていたことが知られるようになった昨今、いかなる意味を持ちうるのか。いずれの解釈を取るにせよ、註釈テクストの迷宮に目を凝らせば凝らすほどに、読者は Kinbote の全く信用できない語りが引き連れる無数の解釈の可能性に翻弄され、この異形の実験小説が織り成す “an intricate and lunatic game of hide-and-seek and rereading” (Calinescu 123) のうちに巻き込まれてしまう<sup>2</sup>。

かくも複雑に複数の虚構の平面が重なり合う *Pale Fire* の構造をいち早く

解き明かしたのは、本作の発表直後に *New Republic* (1962年6月4日号) の誌面を飾った“Bolt from the Blue”と題する Mary McCarthy の長文書評である。“*Pale Fire* is a Jack-in-the-box, a Fabergé gem, a clock-work toy, a chess problem, an infernal machine, a trap to catch reviewers, a cat-and-mouse game, a do-it-yourself kit” (*Writing* 15) という印象的な書き出しで有名なこの書評は、今日の目からすればいささか褒め過ぎのきらいがあるかもしれない。しかしながら、その結びにおいて“centaur-work”たる *Pale Fire* が“a creature of perfect beauty, symmetry, strangeness, originality, and moral truth” (*Writing* 33-34) であると熱を込めて語った McCarthy の註解に関して、“Her review is like a map, tracing patterns and spotting allusions and quotations, to help the reader find his way through the maze of Nabokov’s novel” (Gelderman 243) と評した伝記作家の言葉は決して誇張ではない。そのことは、作者の反論を踏まえて加筆修正のうえ *Encounter* (1962年10月号) に再掲された“Bolt from the Blue”が、後続の *Pale Fire* 論にとって作品解釈の基本線として扱われてきたことからも明らかだ<sup>3</sup>。

## 2. Nabokov を読む Coetzee

さて Coetzee は1974年、当時彼が教鞭を執っていたケープタウン大学英文科の紀要に“Nabokov’s *Pale Fire* and the Primacy of Art”と題する断章形式の批評エッセイを寄稿した。議論の序盤、McCarthy の書評や Field の評伝 (*Nabokov: His Life in Art*, 1967) を踏まえつつ、導入として *Pale Fire* における虚構世界の多層性と決定不可能性をめぐる問題を概観した Coetzee は、本作の物語を Jorge Luis Borges が描く“regression”に準えている(1)。こうした Coetzee の態度は、“The Literature of Exhaustion” (1967)において Borges と Samuel Beckett を“excellent writers who are also technically contemporary”と呼び表し、1961年に第1回国際出版社賞を同時受賞したこの二人に加えて Nabokov が特筆すべき同時代作家であると論じた John

Barth を彷彿とさせる（66-67）。さらに Coetzee はエッセイ “Achterberg’s ‘Ballade van de gasfitter’”（1977）のなかで *Pale Fire* と Beckett の *The Unnamable*（1953）、そして Barth の *The Lost in the Funhouse*（1968）を並べて、これら三作品の作者が “a veritable poetics of failure” すなわち “a program for constructing artifacts out of an endlessly regressive, etiolated self-consciousness lost in the labyrinth of language and endlessly failing to erect itself into autonomy” を体現すると論じた（*Doubling* 87）。この議論からも、Borges の “the implicit theme” を “the difficulty, perhaps the unnecessary, of writing original works of literature” のうちに見出した、“The Literature of Exhaustion” における Barth の姿が想起されるだろう（69）<sup>4</sup>。

Tanner もまた *City of Words: American Fiction 1950-1970*（1971）において Barth を参照しつつ、Borges とともに Nabokov が同時代のアメリカ作家に多大なる影響を与えた可能性を指摘していた（47）。決定的論的システムに対するパラノイアを主題化するとともに、流動的なアイデンティティの有り様を問題視しつつ言語的自意識を前景化させること。こうした 1950 年代から 60 年代にかけてのアメリカ小説の兆候をいち早く看取した Tanner の議論の着想源は、他ならぬ *Pale Fire* のうちにあった（21）。そこで注目されたのが、ジュネーヴを発った Gradus の足取りをたどる Kinbote の註釈に見られる、“In the vicinity of Lex he lost his way among steep tortuous lanes”（198）という一文である。社会的空間と個人の内的空間とのあいだに位置する “a third or mediating area” たる、作家が己の自由と形式を探究する場としての “verbal space” ——それを欲する戦後アメリカの文学的想像力の謂いを、Tanner は卑俗な物質主義者の象徴たる Gradus の方向感覚を狂わせる「言語の都市」に求めた。曰く、華麗なる言語遊戯を繰り広げる Nabokov の *Pale Fire* こそ、後続のアメリカ作家にとっての規範——“an exhibition of the kind of freedom from inherited formulae and prescriptions which many American writers are seeking” となりえた作品と呼ぶに相応しい。

When James says London, or Joyce says Dublin, we permit ourselves to draw on our associations from more orthodox geographies. But when Nabokov says America and Zembla and puts them together in the same frame as though belonging to the same dimensions-cohabiting on one plane-then our reading of the sign is necessarily more confused, the old associations are unsettled, and normal confidences as to the location of the “real” are shaken. The old geographies no longer obtain. This of course is exactly what he intends and I think we can imagine the kind of delight it might give to American writers who have a suspicion of old maps. It certainly gave pleasure to Mary McCarthy, who wrote very persuasive and appreciative eulogy on the book when it appeared. (34)

実際に Coetzee が *Pale Fire* を論じるにあたって *City of Words* を手に取ったのか、その事実は定かではない。だが Tanner と同じく McCarthy の書評と Field の評伝を参照していることからして、その論調に「言語の都市」論との類似性が見られるのも当然であろう。Barth にも通じるメタフィクション論的な観点に立ち、Borges や Beckett との比較の可能性を視野に入れた Coetzee が、いわば McCarthy から Tanner に至るまで、1960 年代をかけて形成・発展した黎明期の Nabokov 研究のパラダイムを共有していたことは確かだ。

### 3. 歴史の欠如

ところで “Nabokov’s *Pale Fire* and the Primacy of Art” の前半、第 1 節から 7 節にかけては緩慢な調子が見受けられた Coetzee の筆は、Nabokov の代名詞たる Sigmund Freud に対する辛辣な批判を議論の俎上に載せた箇所、すなわち Kinbote の註釈を精神科医の沈黙が生み出す患者のフラストレーションを論じた Jacques Lacan のローマ講演の一節と併読する第 8・9 節 (3-4)

を過ぎたあたりから急速に勢いづき始める。本稿が重視するのは続く第10節、“[t]he most radical artist of Nabokov's generation”（5）としてBeckettを呼び出して以降の言葉遣いである。タイトルからして芸術至上主義者としてのNabokov賛美に終わるのかと思いきや、*Pale Fire*に対するCoetzeeの評価はいささか手厳しい。彼にしてみれば、Beckettの “[the] most radically decreative work” たる *The Unnamable* に比して本作の企図は生温く感じられたらしい。“*Pale Fire* interrogates its own fictional premises, but does not so with an irony [...] which nudged us toward looking-glass, the child's kingdom of Zembla”（5）とも語るCoetzeeの批判は、Rainer Maria Rilkeの晩年の手紙と比較においてNabokovの亡命作家としての文学的営為に論及した第12節において、“America is contained in Nabokov's language, like a fly in amber”と指摘される箇所で最高潮に達する（6）。末尾を飾る第13節においても論調は変わらず、エッセイは自らの評釈を内在化した “a closed system of mirrors” たるこの濃密なメタフィクションが “a monument of unageing intellect”であるとする皮肉で結ばれている（6）。

のちに1980年代末から1990年代初頭にかけてDavid Attwellが行ったインタビューにおいて、第一長篇小説 *Dusklands*（1974）における *Pale Fire* の影響を尋ねられたCoetzeeは、開口一番そうした関連性を真っ向から否定することになる。本稿の文脈においてとりわけ目を惹くのは、そこでCoetzeeが、生涯ロシアを愛し続けたであろうNabokovが語るアメリカへの愛国心に疑問を呈したのち、*Pale Fire*論でも参照されたRilkeの手紙を引き合いに出しつつ、次のようにその創作に見られる歴史意識の欠如について不満を露わにしたことだ。

Underneath the surface, in Nabokov, there are real pain and real loss. He said he loved America, but how could he have, really? He was grateful to America, he was amused and intrigued by America, he became an expert on America, but his heart (as I read his heart) was as much with the Old World as

Rilke's was.

There is more of the tragedy of the loss of that world in Rilke's wonderful letter than there is in all of Nabokov. That is, I think, why I have lost interest in Nabokov: because he balked at facing the nature of his in its historical fullness. (*Doubling* 28)

この発言のうちにこそ、Coetzee が *Pale Fire* を “the frozen music of high art” と呼び、そこで描かれる “the emblem of exile” たるアメリカを「琥珀のなかの蠅」に喻えた理由が求められる (“Nabokov's *Pale Fire*” 6)。Coetzee も言うとおり、確かに Nabokov は祖国喪失がもたらした痛みを剥き出しのまま読者に差し出すタイプの作家ではなく、一貫して同時代の歴史に対して一定の距離を取り続けていたかに見える。本稿の冒頭で触れたように、1964 年の *Bend Sinister* の復刊にあたってその序文で自らの政治的無関心を高らかに謳い上げた作家は、翌 1965 年に上梓されたロシア語小説 *Soglyadatay* (1930) の英語翻訳版の序文では、さらに “indifference to community life and to the intrusions of history” (*The Eye*, n. pag.) を表明していた。“Nabokov's *Pale Fire* and the Primacy of Art” をメタフィクションに内在する歴史性をめぐる問題提起として捉えるならば、フィクションの脱歴史化を理想とする Nabokov の態度——芸術の優位でもって歴史の力に抗おうとする、そのポストロマン主義的な身振りに Coetzee が疑いの目を向けることにも合点がいく (Attwell 18, 100)<sup>5</sup>。

こうした Coetzee の批判は、貝澤哉が「ナボコフのロシア」で展開した議論と少なからず響き合う。「ナボコフあるいは物語られた亡命」と題する特集を組んだ『ユリイカ』(1991 年 10 月号) を初出に持つ同論考において、貝澤は Nabokov における「異様に美しいロシア」と「過度に自己意識化された文学的虚構との結合」がもたらす違和感について、その理由を作家が思い描くロシアに歴史が欠如していること、すなわち「一回的な個別性、具体性がない」ことに求めた。だがここで肝要なのは、「この美しい「ロシア」

は実は、虚構の世界に反射された作家の閉じられた意識内の記憶にほかならないのであり、それは時間を欠いた、超歴史的で自足的な世界である」と論じた貝澤が、その世界を前に彼自身が立ち止まってしまった Coetzee とは対照的に、「追憶のなかの「ロシア」という美しい虚構の装置は、その外部にある歴史的で具体的なロシアのコンテクストに照らして考えなおされなければならない」とも述べていたことだ（242）。同様のことは、*Lolita* のベストセラー化がもたらした経済的な自由を享受すべく、1960年代初頭にスイスに渡った晩年の Nabokov にとってのアメリカにも当てはまるだろう。Coetzee が思い描いた「琥珀のなかのアメリカ」に関しても、それを産出した同時代の歴史の堆積のうちに、つまりは Nabokov が置かれた歴史的で具体的な冷戦のコンテクストに照らして再考されなければならない。

したがって今日の目から見た Coetzee の *Pale Fire* 論の重要性は、Nabokov における歴史の欠如を嘆いた彼の言葉が、むしろ生粹の冷戦戦士たるこの帝政ロシア出身のアメリカ作家の歴史性を見出す契機となりうるという、そのアイロニカルな一点に尽きる。Nabokov の冷戦コンテクストを概観した Norman も指摘するように、1946年の訪米に際して Winston Churchill が鉄のカーテンの存在を示唆し、翌 1947 年に Harry S. Truman が George F. Kennan の封じ込め理論を基盤とする外交政策を打ち立てるよりも先に、共産主義革命によって祖国を追われた亡命作家は、1919年に誕生した彼にとっての悪しき敵国との “the long Cold War” を常に既に戦っていたのではないか (“Cold War” 257-58)。Coetzee の議論はそれに先立つ McCarthy の議論を踏襲し、*Pale Fire* を自己完結した「閉鎖系」として捉えていた。なるほど、いわば *Pale Fire* を取り巻く解釈の閉回路の内側に立ち、本作を一種の文学的パズルとして読もうとする限り、Nabokov が「古い地図」を引き裂き、ゼンブラなる独自の現実を持つ審美空間を見事に作り上げたとする前述の Tanner の議論にも首肯できる。しかしながら、そこで参照された McCarthy の議論でさえ、物語の細部に潜む文学的引喩をつぶさに読み解きつつ、あくまでその美的価値を強調しながらも “a ‘Zembla,’ behind the Iron

Curtain” (*Writing* 18) から目を離せなかったように、本作の物語の細部にはテクストの外側の現実——冷戦期の国際情勢との短絡の可能性が隠されている<sup>6</sup>。

#### 4. 幻想の地政学

Steven Belletto の “The Zemblan who came in from the Cold, or Nabokov’s *Pale Fire*, Chance, and the Cold War” (2006) は、それ以前の *Pale Fire* 論によって捨象された作品の同時代性の意義を問うた画期的な論考だった。のちに Belletto の主著 *No Accident, Comrade: Chance and Design in Cold War American Narratives* (2013) に収録された同論の主眼は、Kinbote が意気揚々と語る同性愛に彩られたゼンブラ国の宮廷ロマンスを、Alan Nadel が言う「封じ込めの文化 (containment culture)」のアレゴリーとして捉えなおすことに置かれている。例えは本作のイギリスでの出版に際して *New Statesman* (1962年11月9日号) に掲載された Frank Kermode の書評 (“Zemblance”) は、Kinbote のセクシュアリティをもっぱら世間と隔絶した芸術家のアレゴリーと見なした (*Continuities* 178)。それに対して Belletto は、異性愛規範の強化を目論む同時代のアメリカで流行した心理学的言説にも留意しつつ、ゼンブラ物語をニュー・ワイのホモフォビックな空間に息を詰ましたこの註釈者がクローゼットに秘めた誇大妄想として受け取ることを目指した (*No Accident* 61-70)。だが本稿の文脈においてあらためて目を向けるべきは、そうした卓抜なクィア・リーディングを通じて *Pale Fire* 論に核批評を導入する余地を見出した Belletto が、核の「封じ込め」をめぐる国際政治的な現実を背景に本作を読み解くことによって、作中の地理的表象に潜む政治的含意を、いわばテクストの地政学的無意識として炙り出してみせたことだ<sup>7</sup>。

「ゼンブラ」という記号は、まずもって *Pale Fire* とイギリス古典文学との結節点としての意味を持つ。文学教師である Shade は、彼が “Pale Fire”

の形式に採用したヒロイック・カプレットの名手として知られる Alexander Pope の専門家だった。“Pale Fire” 第4詩篇第12連において、安全剃刀が大陸を横断するというイメージで彼にとってのモーニングルーティンたる髭剃りを歌った詩人は、そこで不意に “[...] and now I plough / Old Zembla's fields where my gray stubble grows” と呟く (67)。Kinbote の註釈によれば、この部分の草稿の余白には、Pope の *Essay on Man* 第2書簡から取られた “At Greenland, Zembla, or the Lord knows where” という詩句が引用されていたという (272)。だが実のところ、Pope が思い描いた極地の姿は、その幻想的なヴェールを剥ぎ取られることになる。というのも、Kinbote がロシア出身者を思わせる彼の姓が “a kind of anagram of Botkin or Botkine” ではないかと訝る同僚に対して、“You are confusing me with some refugee from Nova Zembla” と、皮肉まじりに “Nova” の部分を強調しながら応じていたからだ (267)。これに先立ちゼンブラが話題になった際にも、註釈者はその地名が “a corruption not of the Russian Zemlya, but of Semblerland, a land of reflections, of ‘resemblers’” であると説明していた (265)。

ノヴァ・ゼンブラという実在の地名は、Nabokov が 1957 年 3 月 24 日付の書簡において、直前にダブルデイ社から出版された *Pnin* の編集を担当した Jason Epstein に明かした *Pale Fire* の初期構想にも顔を覗かせる。“The Story starts in Ultima Thule, an insular kingdom, where a palace intrigue and some assistance from Nova Zembla clear the way for a dull savage revolution” (*Selected Letters* 212-13)。あるいは *The New Yorker* (1942 年 6 月 6 日号) に掲載された英語詩 “The Refrigerator Awakes” が繰り広げる極地幻想の物語には、“a trembling white heart with the frost froth upon it, / Nova Zembla, poor thing, with that B in her bonnet” というナンセンス詩を思わせる詩行が含まれていた (*Poems* 153)。なぜ Nabokov はかくもノヴァ・ゼンブラに執着するのか。*Speak, Memory: An Autobiography Revisited* (1967) の読者であれば、その第3章第1節において当地と作者の祖先との結び付きが語られていたこと (43) を思い出しながら、Kinbote のゼンブラ幻想のうちに現実の地図の似

姿を認めるかもしれない。

だがもちろん、事は素朴な伝記批評に回収されるほど単純ではない。Kinbote が “Pale Fire” の 949 行目に付した註釈によれば、1959 年 7 月 20 日にニューヨーク入りを果たした Gradus は、その翌日——彼がようやく見つけたゼンブラ国の元王に銃口を向ける運命の日の朝にセントラルパークに赴き、そこでコーヒーを片手に *The New York Times* を読み始めたという。その紙面には、次のようなニュースが並んでいた。

Hrushchov (whom they spelled “Khrushchev”) had abruptly put off a visit to Scandinavia and was to visit Zembla instead (here I tune in: “*Vi nazīvaete sebya zemblyakami, you call yourselves Zemblans, a ya vas nazīvayu zemlyankami, and I call you fellow countrymen!*” Laughter and applause). The United States was about to launch its first atom-driven merchant ship (just to annoy Ruskers, of course, J. G.).” (274)

McCarthy はノヴァ・ゼンブラに関して、それが “a group of islands in the Arctic Ocean, north of Archangel” であり、その名前が “new land” を意味するロシア語の “Novaya Zemlya” に由来するとだけ記していた (*Writing* 20-21)。この地誌的な註釈に同時代性が欠如していることを指摘する Belletto は、実際の *The New York Times* (1959 年 7 月 21 日号) の 1 面に “Khrushchev Calls Off Plan for a Visit to Scandinavia” という見出しが躍っていたことにも留意しつつ、ノヴァ・ゼンブラ、ないしはノーヴァヤ・ゼムリヤーが、高度冷戦期においては “a far-off place with a very particular political importance” すなわち “the site where the Soviets tested their atomic bombs” であったという史実への注目を呼び掛ける (*No Accident* 70-73, 171n36)。

なるほど、1958 年以降に実際にソ連が北極圏で行った核実験は、折に触れて当時のアメリカの新聞各紙を賑わせていた。Belletto に続いて *Pale Fire* に隠された “nuclear signs and symbols” を拾い集めた Pitzer も指摘するよう

に、例えば1961年10月30日にノーヴァヤ・ゼムリヤで行われた史上最大の核爆弾、ツアーリ・ボンバをめぐる実験をめぐる報道が、スイスに渡つて以降 *New York Herald Tribune* を読むことを日課とした Nabokov の目に留まらなかったとは考えにくい(275)。そしてまた、「ゼンブラ」という記号に極めて政治的なトポスとしての意味を認める同時代の読者の目からすれば、本作が描く共産主義の脅威は核戦争の不安と文字どおり短絡的に結び付いたことだろう。だとすれば、先述の Coetzee が用いたメタファーをもとに *Pale Fire* を読みなおすとき、“Nabokov’s *Pale Fire* and the Primacy of Art” ではなぜか一度も触れられることのなかった作中の「琥珀」にまつわるイメージもまた、本作における「封じ込め」をめぐる修辞学を——Belletto とはまた別の仕方で——作品発表当時の冷戦コンテクストに照らして読み解くための手掛かりとなるのではないか。

## 5. 琥珀と電気

そこでまず取り上げるべきは、“*Pale Fire*” の第2詩篇第10連が描く回想において、妻と家路につく Shade が街路樹に目をやり、そこに “An empty emerald case, squat and frog-eyed / Hugging the trunk” と、その “companion piece” たる “A gum-logged ant” を発見する場面である(41)。前者に用いられた「空っぽのエメラルド色の殻」という表現に註を付けた Kinbote は、それが “semitransparent envelop left on a tree trunk by an adult cicada that has crawled up the trunk and emerged” であると指摘したのち、Shade が教えるワーズミスの学生が蝉の姿形を知らなかつたという逸話に触れて、アメリカ英語に関する術学を上記の一節の直後で言及される Jean de Lafontaine にまつわるトリビアに結び付ける。

Ignorant settlers had dubbed it “locust,” which is, of course, a grasshopper, and the same absurd mistake has been made by generations of translators of

Lafontaine's *La Cigale et la Fourmi* (see lines 243-44). The cigale's companion piece, the ant, is about to be embalmed in amber. (168)

こう述べた直後、Shade と夕方の散歩に出かけたある日の出来事に話題を転じる Kinbote は、ここに見られる昆虫イメージをもっぱら言語の問題として捉えている。しかしながら、このように Kinbote は Lafontaine の寓話にまつわる誤訳を目ざとくあげつらう反面、一人娘が絶命したまさにその日を振り返るにあたり、この一節にギリシャ神話以来の不死のシンボルとして知られる蝉を登場させた詩人の悲しみを見落としている。

振り返ってみれば、“Pale Fire” 第 2 詩篇の最終行——文字どおり詩の中心に位置する 500 行目は、風が吹き荒れる雪どけの夜に一人、地元の湖に向かった Hazel が湖面の薄氷を踏み破る描写だった (51)。つまり、想像のなかの娘の最期の瞬間を取り囲むように “Pale Fire” の詩行をデザインした Shade は、240 行目で言われる「樹脂で埋もれた蟻」に、琥珀のごとき詩的言語のうちに娘への思いを封じ込めようとする己の姿を喚起する役割を担わせていた。こうした “Pale Fire” の昆虫イメージが持つ形而上学的含意との関連において、334 行目に付けられた註釈で Kinbote が紹介する Shade の “The Nature of Electricity” と題する死後発表作は重要な意味を持つ。Hazel がその死の数ヶ月前に記録したとされる、ある納屋での心霊現象についてのエピソードとの関連で引用されたこの短詩は、“The dead, the gentle dead—who knows?— / In tungsten filaments abide, / And on my bedside table glows / Another man’s departed bride” (192) と始まる。“And maybe Shakespeare floods a whole / Town with innumerable lights, / And Shelly’s incandescent soul / Lures the pale moths of starless nights” と語る第 2 連や、末尾の 2 行——“The torments of a Tamerlane, / The roar of tyrants torn in hell” —を通じて、Shade は William Shakespeare と Percy Bysshe Shelly、そして “Tamerlane” (1827) の作者 Edgar Allan Poe を召喚しつつ、この世を去った人々が現世に舞い戻るさまを思い描く (192-93)。Pale Fire を形而上学的な観点から考察

した先行研究のなかには、“The Nature of Electricity”を本作の主題的な中心に据える向きも見受けられる（Rowe 26-28; Trousdale）。

だがここで何よりも重要なのは、作中の占星術のモチーフを明らかにすべく Pleiades の一人である Electra に言及し、英語の「電気（electricity）」がギリシャ語の「琥珀（elektron）」に由来するという語源学的な註釈を述べた McCarthy が、その流れで “The Nature of Electricity” にも触れていたことだ（Writing 31）。言い換えれば、Shade の想像力によって来世の可能性と結び付いた電気のイメージは、「琥珀（amber）」という単語のうちに歴史的に封じ込められているのである。“Pale Fire” における琥珀の表象を、“The Nature of Electricity” が描く様々な明かりの表象と同じく、Shade 流の形而上学をめぐる主題的な磁場を形成するモチーフとして読むこと。そのような解釈を取るとき、註釈テクストを通じてしきりに自らの人生の終わりに思いを巡らせる Kinbote が、“The Nature of Electricity” を引用した直後、唐突に物理的な世界の消滅の可能性を語っていたことはにわかに重要性を帯びてくる。“Science tells us, by the way, that the Earth would not merely fall apart, but vanish like a ghost, if Electricity were suddenly removed from the world” (193). *New York Herald Tribune* (1962年6月17日号) の紙面に組み込まれたインタビューで Nabokov が明かしたところでは、この註釈者は索引を書き終えずして自ら命を絶つという (Think, Write, Speak 316)。こうした作者の意図を踏まえるならば、註釈テクストの結語にノンブルが降られていなかったことにも納得がいく。Kinbote が Hazel と同じく自殺の道を選ぶのであれば、註釈の結びで彼が言う “a bigger, more respectable, more competent Gradus” (301) は確かに標的を見誤ることはないのだろう。しかしながら、註釈者の頭をよぎる破局のヴィジョンもまた、1950年代アメリカの時代精神たる終末論的な不安と無関係だったはずがない<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> ウィリスト・ガイスト

## 6. 空に取り憑かれた詩人

周知のとおり、*Lolita* が大西洋の両岸でにわかに波紋を呼び始めた 1957 年は、10 月 4 日のソ連による世界初の人工衛星スプートニク 1 号の打ち上げ成功が全米を震撼させた年でもあった。冷戦初期における北大西洋が “the strategic core of the West’s containment of the Soviet military threat” になりおおせたという前提のもと、1950 年代後半における米ソ間のミサイル・ギャップが生み出した “an Atlantic airspace paranoia of targeted citizenry” を背景に持つ本作を “Cold War political novel” として再読した Adam Piette に倣って言えば、別の半球から飛行機を乗り継いで迫りくる殺人マシーンとしての Gradus——ゼンブラ国王の殺害のためだけに生きるこの共産主義者の姿は、いつ何時ノーヴァヤ・ゼムリャーからアメリカ目がけて発射されるともしぬ核ミサイルのアレゴリーとしての意味を持つ (357, 358-60)。これとの関連で思い出されるのが、Gradus が放った銃弾に心臓を撃ち抜かれて即死した Shade の遺体が次のように描写されていたことだ。“The poor poet had now been turned over and lay with open dead eyes directed up at the sunny evening azure” (295).

もとより空を映し出した窓ガラスにそれと気付かず激突して絶命したレンジャクの描写で “Pale Fire” を語り始めた Shade には、空に取り憑かれた詩人とでも呼べるような一面がある。この点に関して、第 1 詩篇が描く叔母 Maude の遺品のなかに、琥珀の変形とも見なしうる “the paperweight / Of convex glass enclosing a lagoon” (36) が含まれていたことに触れておきたい。この「文鎮」に付けられた Kinbote の註釈には、最近の新聞に転載されていたという、“Mountain View” と題する Shade の古い詩が引用されている。そこで詩人は “[t]he vey texture of the sky” について語っており、自然が織り成す束の間の美を自らのうちに閉じ込めようとする。“But we all know it cannot last, / The mountain is too weak to wait— / Even if reproduced

and glassed / In me as in a paperweight” という第2連においては、そうした試みはその山並みと空を描く詩行それ自体によって反復されているかのようだ (115)。

一方で “Mountain View” を註釈に組み込み、まさしく Shade のエクリチュールを自らのテクストのうちに包摶することで保存した Kinbote もまた、詩人との思い出を振り返るなかで幾度となく空を描いていた。日没前に一緒に散歩しながら Shade と語り合った時間を懐かしむ彼の回想には、“amber-and-rose crepuscules” (184) をはじめとして、夕焼けに関する記述が少なくない。Shade の “Pale Fire” のうちにも、例えば286行目に “[a] jet's pink trail above the sunset fire” と綴られている (43)。この飛行機雲の色には注意が必要だ。というのも、894行目の註釈で語られる Kinbote と Shade、そしてワーズミス・カレッジの同僚たちの懇談の場面に登場する共産主義シンパの物理学者が、“a so-called Pink” として読者に紹介されていたからだ。Kinboteによれば、この人物は進歩的教育に価値を見出し、ロシア側のスパイ行為を尊び、赤狩りに時代に思いを馳せては Boris Pasternak の *Doctor Zhivago* (1957) のベストセラー化をソヴィエトの功績として称えるのみならず、アメリカ製の爆弾によってのみ死の灰がもたらされうると考えており、つまりは “what so-called Pinks believe in” を信じて疑わなかったという (266)。このエピソードのうちに *Pale Fire* の物語が冷戦期の現実とにわかに接続される瞬間を見出すとき、奇しくも Hazel の自殺と同じ 1957 年にアメリカ社会を震撼させたスプートニクの衝撃もまた、死してもなお空を見つめ続けた Shade の形而上学的な関心が高まるきっかけだったと考えることもできるだろう<sup>9</sup>。

Barth は “The Literature of Exhaustion” において、現代を “an age of ultimatencies and ‘final solutions’—at least *felt* ultimatencies, in everything from weaponry to theology, the celebrated dehumanization of society, and the history of the novel” と呼び表していた (67)。こうした終焉の予感、すなわち Barth が言う “Western civilization, or the world, is going to end rather soon” という

“apocalyptic”な雰囲気（72）のなかで書かれた作品であったことを思い出して初めて、スポートニク・ショックの年に本格的な構想がまとまりつつあった *Pale Fire* が、奇しくもキューバ危機の年に読者に届けられたことの意味が浮かび上がってくる。共産主義陣営が選択した「最終的解決」によって、紺碧の空が比喩的な意味で赤く、もしくはピンクに染まり、そこからソ連製の爆弾によって死の灰が降り注ぐ。そうした共産主義の核の脅威がもたらしうる「封じ込め」の失敗をめぐる国家的なパラノイアを *Shade* と *Kinbote* に共有させた Nabokov もまた——人口に膾炙したその芸術至上主義者のごときセルフイメージとは裏腹に——*The Sense of an Ending* (1967) で Kermode が展開した終末論を核批評に敷衍した Tony Jackson が言う “the Cold War sense of an ending” を研ぎ澄ましていたに違いない。

### おわりに——ゼンブラからアルカディアへ

Coetzee の “Nabokov’s *Pale Fire* and the Primacy of Art” に注目した数少ない Nabokov 研究者である Norman は、*Pale Fire* や *Ada, or Ardor: A Family Chronicle* (1969) に通底する田園主義的な主題を、Nabokov のスイスへの隠遁、ならびにその創作において冷戦期の現実から自身を隔離しようとする Nabokov の耽美的な身振りのアレゴリーとして読みなおすなかで、Coetzee が用いた「琥珀」のメタファーを作者にとっての文学芸術の理想、すなわち同時代の歴史的かつ政治的な影響を免れた真空状態の適切な表現と見なした (Nabokov 134)。だが先に引いた *The Eye* の序文の一節を重視しつつ、Nabokov の自伝や主要な英語小説を “a tension between the desire to achieve the texture of time and the menacing presence of history which frustrates that dream” をめぐるドラマとして捉えなおした Norman の議論 (Nabokov 1-2) が示唆するように、いかに作者が無関心を決め込もうとも、不完全な真空たる Nabokov のテクストに侵入した歴史は、同時代の社会問題をめぐる政治的無意識としてその奥底に沈殿し、不意に頭をもたげる瞬間を待っている。

本稿の議論を結ぶにあたり、先に挙げた “Pale Fire” の 286 行目に見られる「夕焼けの焰の上に浮かぶピンクの飛行機雲」という表現に付された註釈にあらためて目を向けよう。そこで Kinbote は、Shade の執筆作業と Gradus の移動の共時性を次のように強調する。

I, too, was wont to draw my poet's attention to the idyllic beauty of airplanes in the evening sky. Who could have guessed that on the very day (July 7) Shade penned this lambent line (the last one on his twenty-third card) Gradus, alias Degré, had flown from Copenhagen to Paris, thus completing the second lap of his sinister journey! Even in Arcady am I, says Death in the tombal scripture. (174)

1963 年 3 月に行われたのち *Playboy* (1964 年 1 月号) に掲載された Alvin Toffler によるインタビューにおいて、Nabokov は *Pale Fire* の執筆に使用したインデックス・カードを披露している。その “a little batch of rejects” のなかには、“Not ‘I, too, lived in Arcadia,’ but ‘I’ says Death, ‘even am in Arcadia’—legend on a shepherd’s tomb” という *Notes and Queries* (1868 年 7 月 13 日号) からの抜粋も含まれていた (*Strong Opinions* 31)。このメモを取るに至ったきっかけは、アメリカ時代の盟友たる Edmund Wilson との文学談義に求められるかもしれない。Wilson が 1957 年 6 月 21 日付の手紙で Nicola Pussin の絵画で有名な銘文の解釈に触れたことを受けて、Nabokov は 8 月 7 日付の返信のなかで、“et in Arcadia ego” を “I (Death) (exist) even in Arcady” と読む自身の理解が Elwin Panofsky の *The Meaning of the Visual Arts* (1955) に基づくと語っていた (Nabokov and Wilson 352-53, 354)。

繰り返せば、先に引いたゼンブラへの言及が含まれた Epstein 宛の手紙はスプートニク・ショックの年——1957 年に書かれたものである。同年に出版された *Pnin* に隠されたホロコーストの主題を例に Nabokov 文学の歴史性を再考した Siggy Frank も論じるように、Pussin の *Et in Arcadia ego*、別名

*The Arcadian Shepherds* (1637-38) の主題もまた、“the rural idyll” たる美的空間を理想としたこの亡命作家の創作行為にとってアレゴリーとしての意味を持つ (19)<sup>10</sup>。ここで *Pale Fire* の出版の 2 年後に世に出た *The Machine in the Garden* (1964)において、Leo Marx が建国期以来のアメリカ的想像力に取り憑いた楽園神話を下支えする感傷的な田園主義について語りながら、“What possible bearing can the urge to idealize a simple, rural environment have upon the lives men lead in an intricately organized, urban, industrial, nuclear-armed society?” (5) と問い合わせていたことを忘れてはならない。アルファベットを遡るかのように、北の果てのゼンブラから「アルカディア」たる Appalachia に、あるいはアメリカ (America)に向かって、緩慢だが着実に近付いてくる Gradus の不気味な姿。それは Kinbote にとっての楽園を脅かす死の影であると同時に、Marx が思い描いたアメリカの「複雑に組織された都会、産業が発達し、核武装した社会」を生きた Nabokov の創作に歴史が投げかけた影でもあったのだ。

\*本稿は第 26 回公益信託福原記念英米文学助成基金の助成を受けた研究成果（研究題目：「ウラジーミル・ナボコフと核の時代の地政学的無意識」）の一部である。執筆にあたっては、日本アメリカ文学会第 61 回全国大会（2022 年 10 月 8 日、於専修大学神田キャンパス）における研究発表の原稿に加筆修正を施した。

## 注

- 1 本稿で言う「高度冷戦期」とは、Daniel Cordle の冷戦史区分にもとづく表現である。Cordle は 1945 年から 1949 年までを “the bomb’s first use to the Soviet Union’s development of an atomic capability” に端を発する “the early atomic age” とし、それに続く 1962 年までのアメリカ国内の危機意識が急速に高まった時期を “rapid technological and geopolitical developments” に特徴付けられた “the high Cold War” と定義した (11, 12)。
- 2 *Pale Fire* の作者主権をめぐる問題については、それ以前の論争の解決を図った Boyd と、その Boyd 自身の議論の問題点を考察した若島を参照。生前の Nabokov は息子 Dmitri を前に、“It does not matter much; let’s just say that each invented the other” と語ったらしい (Stringer-Hye 179)。近年にこの問題を扱った先

行研究としては Alladaye がある。

- 3 *New York Herald Tribune* (1962年6月17日号) に掲載されたインタビューにおいて、Nabokov は McCarthy が *Pale Fire* のタイトルの出典を Shakespeare の *Timon of Athens* ではなく *The Tempest* に求めてしまったと指摘した (*Think, Write, Speak* 316)。“Bolt from the Blue” の加筆修正は、こうした作者自身による応答を踏まえている。New Republic 版においては *The Tempest* をはじめとする Shakespeare への引喩を読み解きながらもタイトルの出典を突き止めることができなかつた McCarthy は、*Encounter* 版ではこの部分を削除し、*Timon of Athens* 第4幕第4場に見られる “pale fire” というフレーズが含まれた Timon の台詞との結び付きを考察するなど、当初の議論を増補している (Review 136; Writing 32-33)。
- 4 Coetzee 研究の文脈における Achterberg 論の評価については、田尻 86-87 を参照。同書でも言及されているように、1965年にフルブライト奨学生として単身アメリカに渡ったのち、ニューヨーク州立大学バッファロー校で英文科助教授のポストを得た Coetzee は、同僚である Barth と親交を深めた (16)。
- 5 J. C. Kannemeyer の評伝によれば、1993年に現代文学を専攻する大学院生に向けてポストモダニズムを講じた Coetzee は、そこで Nabokov が愛したアメリカを “a version of America of small, ethnically white, Republican-voting college towns” と表現した。“He became a specialist, a connoisseur of American life and particularly of middle class culture of the Eisenhower years, which he was careful never to condescend to”とも語られた同講義は、本文で参照したインタビューの発言に対する註釈としての価値を持つ (Kannemeyer 476)。
- 6 “Bolt from the Blue” と同時期に書かれた “J. D. Salinger’s Closed Circuit” (1962)において、McCarthy は “Salinger’s world contains nothing but Salinger, his teachers, and his tolerantly cherished audience-humanity. Outside are the phonies vainly signaling to be let in” と論じた (Writing 39)。この批判は、Nabokov が理想とする解釈共同体にも当てはまるだろう。本稿の作品解釈は、“short-circuit” を Gilles Deleuze が用いた意味で “minor” な、つまりは支配的なイデオロギーによって周縁に追いやられ、その存在を否定された参照枠に目を凝らすことの謂いとした Slavoj Žižek のアイデア (ix-x) に触発されたものもある。
- 7 Belletto 以前にも、Miller が *Pale Fire* に対するクィア・リーディングを試みている。Nabokov における同性愛嫌悪をいち早く取り上げた Bruhm 以降、この主題を扱う先行研究は作家の弟 Sergey Nabokov が同性愛者であったという伝記的事実を重視してきた。比較的最近の論者のなかには、Sergey を Kinbote のモデルと見なす向きもある (Maar 38-41; Pitzer 304-11)。

- 8 1966年にAlfred Appel, Jr.が行ったインタビューにおいても、*Pale Fire*の序文の日付がJonathan Swiftの命日であると指摘されたNabokovは次のように述べていた。“I think it is so nice that the day on which Kinbote committed suicide (and he certainly did after putting the last touches to his edition of the poem)” (*Strong Opinions* 74)。こうした発言を“authorial trespassing”と呼ぶMichael Woodは、“Nabokov underrates the energy and the wit that Kinbote and his book still possesses at the end”として、Kinboteが生き延びた可能性を指摘する(186)。
- 9 Kinboteが語るGoldsworth夫人の書棚の描写の草稿には、Pasternakへの批判を意図した“from Adverse to Zhivago”というフレーズを削除した形跡が認められる(Roth 9)。*Doctor Zhivago*の評価をめぐるNabokovとRoman GrinbergやHarry Levinとの対立を論じた秋草俊一郎によれば、同作はアメリカに生きる亡命ロシアの知識人のあいだで「政治的な踏み絵」としての意味を持ちえた(50)。なお、完成版テクストでは当該箇所が“from Amber to Zen”(83)と書き換えられたが、前者は1947年にOtto Preminger監督の手で銀幕を飾ったKathleen Winsorの*Forever Amber*(1944)を、後者はエピグラフに禪の公案を掲げたJ. D. Salingerの*Nine Stories*(1953)を指す(Boyd 98)。Winsorの大河小説のヒロインの名前もまた、*Pale Fire*における「琥珀」の主題系の一部を成す。
- 10 拙論「明白なる薄命」では、*Pnin*におけるホロコーストの主題を核批評に敷衍する可能性を検討した。本文で引用したEpstein宛の書簡には、実際のJohn F. Kennedyの就任前にも関わらず“President Kennedy”との記述が見受けられる(*Selected Letters* 213)。*Pale Fire*とアメリカ大統領の死の関連性については、拙論「暗殺のパリンプセスト」を参照。

#### 参考文献

- Alladaye, René. *The Darker Shades of Pale Fire: An Investigation into a Literary Mystery.* Michel Houdiard Éditeur, 2013.
- Attwell, David. *J. M. Coetzee: South Africa and the Politics of Writing.* U of California P, 1993.
- Bader, Julia. *Crystal Land: Artifice in Nabokov's English Novels.* U of California P, 1972.
- Barth, John. “The Literature of Exhaustion.” 1967. *The Friday Book: Essays and Other Nonfiction.* 1984. Johns Hopkins UP, 1997, pp.62-76.
- Belletto, Steven. *No Accident, Comrade: Chance and Design in Cold War American Narratives.* Oxford UP, 2012.
- . “The Zemblan Who Came in from the Cold, or Nabokov's *Pale Fire*, Chance, and

- the Cold War.” *ELH*, vol.73, Fall 2006, pp.755-80.
- Bertram, John, and Yuri Leving, editors. *Lolita—The Story of a Cover Girl: Vladimir Nabokov’s Novel in Art and Design*. Print, 2013.
- Bethea, David M., and Siggy Frank. “Contextualising Nabokov.” Bethea and Frank, pp.1-8.
- , editors. *Vladimir Nabokov in Context*. Cambridge UP, 2018.
- Boyd, Brian. *Nabokov’s Pale Fire: The Magic of Artistic Discovery*. Princeton UP, 1999.
- Bruhm, Steven. “Queer, Queer Vladimir.” *American Imago*, vol.53, no.4, 1996, pp.281-306.
- Calinescu, Matei. *Rereading*. Yale UP, 1993.
- Chupin, Yannicke, Agnès Edel-Roy, and Monica Manolescu. “Introduction.” *Nabokov Online Journal*, vol.15, 2021, pp.1-7.
- Coetzee, J. M. *Doubling the Point: Essays and Interviews*. Edited by David Attwell, Harvard UP, 1992.
- . “Nabokov’s Pale Fire and the Primacy of Art.” *UCT Studies in English*, no.5, 1974, pp.1-7.
- Cordle, Daniel. *State of Suspense: The Nuclear Age, Postmodernism and United States Fiction and Prose*. Manchester UP, 2008.
- Dragunoiu, Dana. *Vladimir Nabokov and the Poetics of Liberalism*. Northwestern UP, 2011.
- Field, Andrew. *Nabokov: His Life in Art*. Little, Brown, 1967.
- Frank, Siggy. “‘The Shadow of Fool-Made History’: History as Narrative in Nabokov’s Work.” *Comparative Studies in Modernism*, no.7, Fall 2005, pp.11-20.
- Gelderman, Carol. *Mary McCarthy: A Life*. St. Martin’s, 1988.
- Jackson, Tony. “Postmodernism, Narrative, and the Cold War Sense of an Ending.” *Narrative*, vol.8, no.3, Oct. 2000, pp.324-37.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. 1981. Routledge, 2002.
- Kannemeyer, J. C. *J. M. Coetzee: A Life in Writing*. Translated by Michiel Heyns, Scribe, 2012.
- Kermode, Frank. *Continuities*. Routledge and Kegan Paul, 1968.
- . *The Sense of an Endling*. 1967. Oxford UP, 2000.
- Leving, Yuri. *Keys to The Gift: A Guide to Vladimir Nabokov’s Novel*. Academic Studies, 2011.
- Leving, Yuri, and Frederick H. White. *Marketing Literature and Posthumous Legacies: The Symbolic Capital of Leonid Andreev and Vladimir Nabokov*. Lexington, 2013.
- Maar, Michael. *Speak, Nabokov [Souls Rex. Die schöne böse Welt des Vladimir Nabokov]*.

2007. Translated by Ross Benjamin, Verso, 2009.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. 1964. Oxford UP, 2000.
- McCarthy, Mary. Review of *Pale Fire*. 1962. *Nabokov: The Critical Heritage*, edited by Norman Page, Routledge and Kegan Paul, 1982, pp.124-36.
- . *The Writing on the Wall and Other Literary Essays*. Harcourt, Brace, Jovanovich, 1970.
- Miller, Paul Allen. "The Crewcut as Homoerotic Discourse in Nabokov's *Pale Fire*." *Discourse and Ideology in Nabokov's Prose*, edited by David H. J. Larmour, Routledge, 2002, pp.74-88.
- Nadel, Alan. *Containment Culture: American Narratives, Postmodernism, and the Atomic Age*. Duke UP, 1995.
- Nabokov, Vladimir. *Bend Sinister*. 1947. Vintage, 1990.
- . *The Eye*. 1965. Translated by Dmitri Nabokov in collaboration with the author, Vintage, 1990.
- . *Pale Fire*. 1962. Vintage, 1989.
- . *Poems and Problems*. 1970. Weidenfeld and Nicolson, 1972.
- . *Selected Letters 1940-1977*. Edited by Dmitri Nabokov and Matthew J. Bruccoli, Harcourt Brace Jovanovich, 1989.
- . *Speak, Memory: An Autobiography Revisited*. 1967. Penguin, 2000.
- . *Strong Opinions*. 1973. Vintage, 1990.
- . *Think, Write, Speak: Uncollected Essays, Reviews, Interviews, and Letters to the Editor*. Edited by Brian Boyd and Anastasia Tolstoy, Alfred P. Knopf, 2019.
- Nabokov, Vladimir, and Edmund Wilson. *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-1971*. 1979. Edited by Simon Karlinsky. Rev. and Updated ed., U of California P, 2001.
- Norman, Will. "The Cold War." Bethea and Frank, pp.257-65.
- . *Nabokov, History, and the Texture of Time*. Routledge, 2012.
- Piette, Adam. "Sputniks, Ice-Picks, G.P.U.: Nabokov's *Pale Fire*." *The Edinburgh Companion to Atlantic Literary Studies*, edited by Leslie Elizabeth Eckel and Clare Frances Elliott, Edinburgh UP, 2016, pp.357-70.
- Pitzer, Andrea. *The Secret History of Vladimir Nabokov*. Pegasus, 2013.
- Roth, Matthew. "The Composition of Nabokov's *Pale Fire*." *Nabokov Online Journal*, vol.9, 2015, pp.1-35.

- Rowe, William Woodin. *Nabokov's Spectral Dimension*. Ardis, 1981.
- Stegner, Page. *Escape into Aesthetics: The Art of Vladimir Nabokov*. 1966. William Morrow, 1969.
- Stringer-Hye, Sullen. “‘Laura Is Not Even the Original’s Name’: An Interview with Dmitri Nabokov.” *The Goalkeeper: The Nabokov Almanac*, edited by Yuri Leving, Academic Studies, 2010, pp.177-92.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970*. Harper and Row, 1971.
- Trousdale, Rachel. “‘Faragod Bless Them’: Nabokov, Sprits, the Electricity.” *Nabokov Studies*, vol.7, 2002/2003, pp.119-28.
- White, Duncan. *Nabokov and His Books: Between Late Modernism and the Literary Marketplace*. Oxford UP, 2017.
- Wood, Michael. *The Magician’s Doubt: Nabokov and the Risks of Fiction*. Princeton UP, 1994.
- Žižek, Slavoj. *The Parallax View*. MIT, 2009.
- 秋草俊一郎『アメリカのナボコフ——塗り替えられた自画像』慶應義塾大学出版会、2018年。
- 貝澤哉『弓|き裂かれた祝祭——バフチン・ナボコフ・ロシア文化』論創社、2008年。
- 後藤篤『暗殺のパリンピセスト——『淡い焰』と歴史の律動』『Krug』（日本ナボコフ協会）新版第15号、2023年3月、12-18頁。
- . 「明白なる薄命——ウラジーミル・ナボコフの『プロン』におけるハッピーエンドの追求」『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』貴志雅之編、金星堂、2018年、177-92頁。
- 田尻芳樹『J·M·クツツエ——世界と「私」の偶然性へ』三修社、2023年。
- 若島正「ゼンブラーの彼方へ」『アメリカ文学ミレニアムⅡ』国重純二編、南雲堂、2001年、214-27頁。